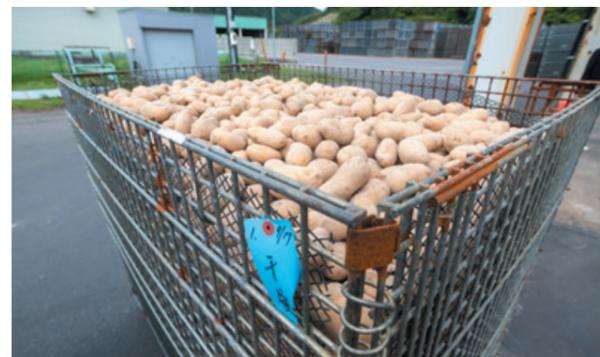




●仕分けした種ばれいしょを倉庫からトラックへ。コンテナ1個で約3,000キログラムの重量があります。



●JA新はこだての出荷場に運ばれた斉藤さんの種ばれいしょ。重量を計っている間に他の生産者の方も続々と種ばれいしょを運んできました。

# 明日を語ろう！ 北の農業人

KITANO NOUGYOUBITO



北海道農業に限りない愛情を注ぎ、  
たゆまぬ努力を続ける人々がいます。  
農業の未来を創造する「北の農業人」の  
情熱や取り組みをご紹介します。



●種小豆の圃場には、採種圃場の証明である看板が立っています。

●高い技術力で地元特産品の生産を支える採種生産者  
祖父と父の後を継ぎ18歳で農業の道へ。  
種ばれいしょの栽培を主力に  
地域の農業を守り続ける。

「厚沢部町」  
斉藤千億さん



●採種生産者として、ばれいしょや小豆の生産を支える厚沢部町生まれの斉藤さん。「連休や夏休みには、町外にいる息子が農業を手伝いに来てくれる」とうれしそうに話します。



冷害による凶作を機に  
水稲から畑作物へ

農業と林業を基幹産業とする厚沢部町。鶉川や厚沢部川の支流沿いには肥沃な農耕地が広がっています。水稲、ばれいしょ、大小豆の生産が盛んで、これらの作付面積の合計は約1930ヘクタール。町全体の作付面積の約86%を占める割合となります。

当路地区で農業を営む斉藤千億さんは、16ヘクタールほどの畑を夫婦2人で切り盛りし、地元の特産品であるメークインの種ばれいしょや小麦、種小豆・大豆を4年輪作で栽培しています。祖父から父へと受け継がれた農業というバトンを受け取るために農業高校に進学した斉藤さんですが、「高校生の頃は卒業したら農業以外の仕事でアルバイトをして、繁忙期だ

け実家の農作業を手伝おうと考えていました」と言います。しかし、卒業と同時に父親が体調を崩したことで、18歳にして家業を継ぐことになりました。

「あの頃は水稲栽培一筋。春先は忙しかつたですが、夏は水の管理だけでよく、あまり苦労は感じませんでした。しかし1993年の記録的冷害による大凶作を経て安定した農業経営を考えるようになり、翌年からは畑作に転向。以来、春から雪が降るまでは慌ただしい毎日です」

技術を要する  
種ばれいしょ栽培で  
安定経営を図る

斉藤さんの栽培作物のメインは種ばれいしょで、圃場は約5ヘクタールあります。

## 40年の営農経験を経て思う 農業のこれから

厚沢部町でも生産者の高齢化は進んでおり、病気や後継者問題で離農をしようという人も少なくありません。そのような中、幸いにも当路地区は後継ぎに恵まれた農家が多いそうです。斉藤家でも次男の陸さんが4代目となるべく、恵庭市にある専門学校で農業を学んでいます。陸さんは6次産業化にも挑戦したいと夢を抱いているそうです。

「親としてはうれしい気持ちあり、思うところあり、という感じでしょうか。営農を始めてもうすぐ40年、農業の喜びや辛さ、は身をもつて経験してきましたからね。でも、息子は小さい頃から作業を手伝ってくれているので大変さはわかっているは

す。ばれいしょは、ジャガイモシストセンチュウ、ウイルス病などに侵されやすく、一度感染すると防除は不可能。生産地にも消費者にも多大な影響をきたすため、管理がきわめて重要です。北海道を含む11道県では健全無病な種ばれいしょの生産・流通のため、農林水産省植物防疫所の検査を受けることが義務付けられています。

「私の圃場では例年6月から7月に3回の検査が行われます。この時期は週1回の農薬散布や草取りなど、特に気が抜けません。種ばれいしょは食用と比較すると利益につながりやすいですが、生産量が決められており、圃場を拡大することができないという面もあります。もっとも、うちは私と妻の2人なので今の規模で十分です」と斉藤さんは話します。

す。その上で農業という仕事を選ぶのなら、息子の思うように入り組んでほしいと思っていますし、その時は私と妻がしっかりとサポートしますよ」

今夏、北海道は記録的な高温と少雨で各地の農作物に被害が発生しました。斉藤さんの種ばれいしょも干ばつの影響で十分に生育できず、サイズは例年よりも小ぶりだそうです。「近年は経験したことのない天候が続いている」と頭を悩ませる斉藤さんですが、それでも農業を続ける理由を次のように話してくれました。

「農業の魅力はやはり秋の収穫。豊作の年は「来年もがんばろう」と前向きな気持ちになり、不作の年は「来年こそは」と次にかける思いが強くなります。それこそが、農業の醍醐味だと思います」